
遊戯王 ～黒き火炎～

満足死

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王 ～黒き火炎～

【Nコード】

N7540K

【作者名】

満足死

【あらすじ】

主人公の黒木気炎は、気がついたら遊戯王GXの世界にトリップしていた。しかも手元にあったのは自分が実際に使っていたネタデツキで・・・。

第一話 入学試験（前書き）

かなり分かりにくい部分があるかもしれませんが、ご了承ください。

第一話 入学試験

気がついたら海馬ランドの目の前にいた。

どういう状況か落ち着つきを取り戻したときに確認したところ、海馬ランドには『デュエルアカデミア本校受験会場』と記された看板があった。

自分のポケットには、デッキと受験番号が控えた紙があった。

『受験番号98番』

orz

ここまで受験番号が低いとは。

落ち込んでいると、受付の方から声が聞こえた。

「受験番号110、遊城十代！セーフだね？」

ヤバイ！十代が来たってことはギリギリじゃないか！

「すいません！俺も受験生です！」

どうにかギリギリ間に合うことができた。原作知識があっても何も知らない世界で中卒・浪人はきつ過ぎる。

「お前も受験生か、よろしくな！俺は遊城十代！」

「俺は黒木気炎。お互いがんばって合格しよう！」

十代はもう主人公だから合格確定だからいいよな。俺なんて突然トリップして先が思いやられるって言うのに。

三沢のデュエルの終了し、十代のデュエルが開始された。

「おい君、いいのか？あいつのデュエルを見なくて。」

三沢だー！空気王だー！エアーマンだー！

まあデュエルの結果は分かりきっているしこの世界に来たばかりでデッキの確認をした方が有意義だと思った。

「多分あいつは勝つと思うし、自分の状態を万全にした方がいいと思うってさ」

「なるほど、自分のこともいいが、これからライバルになるかもしれない相手の戦術ぐらい見た方がいいんじゃないか。」

「どうせデュエルアカデミアに入ればデュエルできるし、大会なんて一発勝負だから関係ないと思うぜ。」

そういつてデツキを見る。

待て、これ俺が現実で使っていたネタデツキじゃないか。これどうやって戦えばいいんだ。

「ガツチャ！楽しいデュエルだったぜ！」

ついに十代のデュエルも終わってしまった！デツキ編成している間もないぞ！

ええい、もうやけだ！

そう思い、受験会場に急ぐのだった。

「受験番号98番、黒木気炎です。よろしく願いします！」

「クロノス・デ・メディチナノーネ！」

「（あんなドロップアウトボーイに負けるなんて、屈辱ナノーネ。

こうなったらこのデュエルで名誉挽回ナノーネ。）

あれ、俺もしかして十代のせいでクロノス先生にコテンパンに打ちのめされようとしている？まあどの道デュエルで勝たないといけないわけだから同じか。

「「デュエル！」」

気炎のターン

「俺のターン！俺はUFOタートルを守備表示で召喚！ターン終了！」

気炎

LP 4000

手札 5枚

場 UFO

クロノスのターン

「私のターンデース！ドロー！手札からトロイホースを召喚！さらに速攻召喚を発動！トロイホールは地属性モンスターを生け贄召喚するなら2体分の生け贄になれるノーネ！トロイホースを生け贄に古代の機械巨人を召喚！」

速攻召喚

速攻魔法

手札のモンスター1体を通常召喚する。

いきなりかよ！というより速攻召喚があるからこつちの世界じゃ二重召喚いらないな。

「バトルデース！古代の機械巨人でUFOタートルを攻撃！アルティメト・パウンド！ゴーレムの効果で貫通ダメージを受けてもらうノーネ！」

気炎

LP 4000 2200

「ただどこかでUFOタートルの効果発動！戦闘破壊され墓地に送られたときにデッキから攻撃力1500以下の炎属性1体を攻撃表

示で特殊召喚できる。俺はセカンド・ブースターを特殊召喚！」
「そんな雑魚を召喚しても無駄ナノーネ。これで私のターンは終了デース。」

クロノス

LP 4000

手札 3枚

場 古代の機械巨人

気炎のターン

「俺のターン！俺がさっき召喚したモンスターが雑魚じゃないことを証明してやるぜ！速攻魔法、手札断殺を発動！」

互いに手札2枚を墓地に送り2枚ドロウする。俺はダークブレイズドラゴンと仮面竜を墓地に送る。」

「私は古代の歯車と古代の機械獣を墓地に送るノーネ。」

「俺は創世者の化身を攻撃表示で召喚！」

「おい、攻撃表示だと」

「あいつ、もう勝負をあきらめたのか？」

「いいや、こいつこそが俺の逆転への布石だ。創世者の化身の効果を発動する。」

このカードを生け贄に創世神を手札から特殊召喚する。出でよ、創世神！

さらに創世神の効果により、手札1枚を墓地に送り、ダークブレイズドラゴンを特殊召喚！」

「攻撃力がたった1200！？どういふつもりナノーネ！」

「ダークブレイズドラゴンは墓地から蘇生された場合、攻撃力が2倍になる！」

そしてセカンド・ブースターの効果！このカードを生け贄に攻撃表

示のダークブレイズの攻撃力を1500アップさせる！」

ダークブレイズドラゴン

攻撃力2400 3900

「攻撃力が古代の機械巨人を上回ったのノーネ!？」

「バトルだ!ダークブレイズでゴーレムを攻撃!ダークブレイズの効果でゴーレムの攻撃力分のダメージを受けてもらう!」

クロノス

LP4000 3100 100

「さらに創世神でダイレクトアタック!」

「そんなあゝ。ぐへっ。」

クロノス

LP1000

「ありがとうございます。」

どうにか浪人せずにすんだ!デュエルアカデミアでの生活は不安だけれど楽しみだぜ!

第一話 入学試験（後書き）

こんな感じでいいんでしょうか・・・
先が思いやられます

ダークブレイズの攻撃力の变化が違っていたので変更しました
ご指摘ありがとうございます

第二話 解説Ⅱ？（前書き）

一話目からのミスとは・・・
どうにかがんばろうと思います

第二話 解説Ⅱ？

俺は今デュエルアカデミアに向かう船に乗っている。

俺は今凄く落ち込んでいる。

試験が終わったときにはデュエルアカデミアの生活は楽しみだと思っていた。

ただどよく考えれば『カードが原因で人殺し』が起きたり、手で破けるカードも『本気で投げれば金属にも刺さる』とかそんな危ない世界にトリップすることは無いだろ！

しかもGXの場合2年目には光の結社でいろんな意味で危ない人が増えたり、3年目にいたっては超うつ展開とダークネスのせいで一瞬地球が滅びかけたりしてるぞ！？
もう帰りたい…

そんな事を考えているうちにデュエルアカデミアに着いた。
もう仕方が無い！こんな事を考えずに学生生活を楽しもう！
少なくとも1年間は…

俺は入学式の間、校長先生のありがたくも長く退屈な話を聞き流し、半分寝ていた。

そんな入学式も終わり、俺はレッド寮に向かう。
なぜレッドなのかは受験番号を見てもらえば分かると思う。

「おーい、気炎！」

「待ってくださいよ、アニキ。」

そんな時に、十代がやってきた。何故か翔も一緒だが。

「おう、十代。どうしたんだ。」

「早速だけど、俺とデュエルしてくれ！」

は？なんなんだ？この世界では出会ったらいきなりデュエルでもしなきゃいけない理由でもあるんですか？

「いや、ちよつと荷物置かなきゃいけないし、

デッキ調整も済んでいないから後にしてもらってもいいかな？」

「なんだ、そんな事かよ。いいぜ。じゃ、俺達はデュエルアカデミアの様子を見に行こうぜ！」

「わかったツス、アニキ」

よし、この間に禁止・制限の確認を。こつちの世界に来てから世間の様子とかを調べるのに

必死でデュエルに関する何を何も調べてなかったからな。

「ここが俺の部屋かー。なんか落ち着くけど、一人は寂しいな。」
パソコンを開き、早速禁止・制限を見ると…

「おいおいこれじゃあ、MEの勝ちじゃないかwww」

しかし俺がいた世界の基準でいくと狂っているしか思えないなwww

「おーい、デッキ構築は終わったかー？」

十代！部屋に入る時ぐらいノックしろ！

「ああ、早速デュエルしようぜ！」

確かデュエル場はブルー専用だったよな。おい、平等にしるよ。

「デュエル！」

「俺からいくぜ！ドロー！」

ちょw勝手に先行取るなwww大会だと注意されるぞ。

そっぴや5D'sのワンポイントレッスンでデュエルディスクが先攻後攻を

勝手に決めてくれるとかいつてたな。GXでもそうなのか？

「俺は手札からクレイマンを守備表示で召喚！カードを1枚伏せてターンエンド。」

表守備で召喚とか卑怯じゃないか？エアーマンとか召喚するときとか。

十代

LP 4000

手札 4枚

場 クレイマン、伏せ1枚

「俺のターン。ドロー！俺は仮面竜を守備表示で召喚。さらに苦渋の選択を発動！」

これが禁止じゃないとかカオスデッキが流行っているな。本来なら。

「俺はデッキから5枚を選択し、その中から相手は1枚選択する。相手が選択したカードを手札に加え、それ以外を墓地に送る。」

俺はダークブレイズドラゴン3枚とスキル・サクセサー2枚を選択

する。」

「えーと、どうしようかな。じゃあ俺はダークブレイズドラゴンを選択するぜ！」

「そして手札断殺を発動！俺はダークブレイズドラゴンとスキル・サクセサーを墓地に送る。」

「俺はバーストレディとネクロ・ガードナーを墓地に送る！」

「互いに2枚ドロ！。カードを1枚伏せてターンエンド。」

気炎

LP 4000

手札 3枚

場 仮面竜、伏せ1枚

「俺のターン！俺は融合を発動！場のクレイマンと、手札のスパークマンを融合！」

来い、E・HERO サンダー・ジャイアント！

サンダー・ジャイアントの効果発動！

召喚時に元々の攻撃力がサンダー・ジャイアントより低いモンスター1体を破壊する。

仮面竜を破壊！ヴェイパー・スパーク！」

アニメ効果っていつも思うけど大抵強いよな。妬ましい。

まあサンダー・ジャイアントはコストがついた代わりに

発動回数が増えたからバランス取れてると思うが。

「バトルだ！サンダー・ジャンアイントでダイレクトアタック！ボ

ルテック・サンダー！」

「どわっ！」

気炎

LP 4000 1600

「カードを1枚伏せ、さらにスカイスクレイパーを発動してターンエンドだ。」

十代

LP 4000

手札 1枚

場 サンダー・ジャイアント、伏せ2枚

「俺のターン。ドロー！手札から継承の印を発動！

俺の墓地に同じ名前のカードが3枚以上揃っている場合、

そのモンスターのうち1体を復活させ、このカードを装備する。

蘇えれ！ダークブレイズドラゴン！

さらに手札から地獄の暴走召喚を発動！

モンスターが特殊召喚された時、そのモンスターと同名のカードを

可能な限り召喚できる。

ただし相手もモンスター1体に対して同じ効果を使える。」

「俺のモンスターはサンダー・ジャイアントだから召喚はできない。

」

「俺はダークブレイズ2体を墓地から特殊召喚！

ダークブレイズドラゴンは墓地からの召喚に成功した時、

攻撃力・守備力が倍になる。」

ダークブレイズドラゴン

攻撃力 1200 2400

守備力 1000 2000

「手札からハリケーンを発動！魔法・畏を全て手札に戻す！」

「チェーンして速攻魔法発動！クリボーを呼ぶ笛！デッキからハネクリボーを特殊召喚！」

でた、いつもの壁役。

ハネクリボーって大抵こういった場面でしか活躍しないよな。

十代は本当にハネクリボーを相棒って思ってるのか？

「俺は墓地のスキル・サクセサーの効果を3枚発動！

このカードを除外し、攻撃力を800ポイントアップさせる。

ダークブレイズドラゴン1体に2枚、もう1体に1枚を使用する！」

ダークブレイズドラゴンA

攻撃力 2400 4000

ダークブレイズドラゴンB

攻撃力 2400 3200

「いくぜ！攻撃力4000のダークブレイズドラゴンでサンダー・ジャイアントを攻撃！」

「ネクロ・ガードナーを除外し、効果発動！攻撃を1度だけ無効にする。」

「なら3200のダークブレイズで攻撃！ダークブレイズの効果も

「含め3200ダメージだ！」

「何っ！うわああ〜！」

十代

LP 4000 800

「3体目のダークブレイズでハネクリボーを攻撃！効果で300ダメージだ！」

十代

LP 800 500

「カードを1枚伏せてターンエンドだ！」

気炎

LP 1600

手札 1枚

場 ダークブレイズ3体

俺の伏せカードはリビングデッドの呼び声だ。

ダークブレイズを破壊されても次のターンで3体の総攻撃で勝つことができる。

「なあ気炎、俺のライフは僅かに500。でもこの状況でも逆転できる。そう考えたらわくわくしないか？」

あれ、まさかさっき解説したせいで敗北フラグが立ったか？いやそんなことは無いだろう

と、思いたい…

「いくぜ！俺のターン！ドロー！戦士の生還を発動！バーストレディを手札に戻す！さらに融合を発動！フェザーマンとバーストレディを融合！」

ああ、終わった…せっかく死者蘇生とか第六感とか強欲とか入れてきたのに

「来い、E・HERO フレイム・ウィングマン！そしてスカイスクレイパーを発動！フレイム・ウィングマンでダークブレイズに攻撃！スカイスクレイパーシュート！」

フレイム・ウィングマン
攻撃力 2100 3100

気炎
LP 1600 900

「フレイム・ウィングマンの効果でダークブレイズの攻撃力の1200ポイントのダメージを受けてもらっぜ！」

気炎
LP 900 0

「ガッチャ！楽しいデュエルだったぜ！」

「ああ、俺も久々に楽しかったぜ。」

「アニキ、早くしないと新入生歓迎会が始まっちゃいますよ。」

「何っ！急ぐぞ！気炎、翔！」

「おう！」

なんだかんだで新入生歓迎会は楽しかったし、なにより十代とデュエルできたのがよかった。

けれど、寝ようとした直前に生徒手帳でメールが来た。

『やあ、ドロップアウトボーイ。午前0時、デュエルフィールドで待っている。』

互いのベストカードを賭けた、アンティルールでデュエルだ。

勇気があるなら来るんだな。』

万丈目、寝る前にメールなんて送るな。

第二話 解説Ⅱ？（後書き）

いつかオリカを出すかもしれませんが、
まだ案がまとまってないのでずっと後になりそうです。

第三話 夢？いいえ、現実です。（前書き）

最近良いカードがあたらない・・・

第三話 夢？いいえ、現実です。

とりあえず、この万丈目のメールをどうするべきか。

1・無視

2・とりあえず「行きたくない」と返信する

3・デュエル場に向かう

よし、無視しよう。初期の万丈目のデッキはたしか『地獄』『ヘル』がついていれば
なんでもアリのデッキだったはずだ。間違いなく弱い。ノース校から帰ってきたらデュエルしよう。

しかし…

言い訳がめんどくせー！

万丈目のことだからどうせ後でドロップアウトだのなんだのバカにしてくるのは明白だし、

眠かったとかデッキ調整をしていたら寝ていたとかそんなんじゃ納得しなさそうだしな…

もうこんな事を考えるのはやめよう

とりあえず1時間ほどデッキ調整して寝よう

「紅をデッキに入れるべきか入れないべきか・・・」

「とりあえず苦痛は3積み確定で」

「創世神、今までありがとうございます」

なんだかんだでデッキ構築を終え、すぐに寝た。

「なんか、デュエルアカデミアに来て1日しかたっていないのに、
凄く疲れたな。」

「おい」

ん？

「おい、起きろよ」

「なんだ？万丈目か？」

いや、違う。十代でもないし、翔でもない。

そう、そこにいたのは満足神こと地縛神 C c a p a c A p u だった！

「なんでこんなところにC c a p a c A p uがいるんだ！第一この世界はG Xであって5 D ' sじゃないだろ！」

「いや、驚かせてすまなかったね。私は神。君の神としてのイメージで一番近い姿で来ることにしたんだ。」

いや、確かに神ではあるが。

「まあ、そんなことはどうでもいいとして、今後のことについて聞きたいんだが。」

ゑ？どういこと？

「とりあえず、君がこの世界に来てしまったのは私の不手際なのだ。けれど、このことを他の神に知られたりしたら私はクビだ。

本来なら他の神に相談して君をもとの世界に帰すべきだとは思ったが、

クビにはなりたくないのどうして相談に来た。さあ、どうする？」

ああ、なんて自分勝手。もとの世界に戻りたいといっても、こいつの性格じゃ絶対に反対する。

多分朝方まで。しかし、この世界もある意味悪くないよな。生活は快適だし。カオスな所はあるが。

「さあ、どうするんだい？望めば精霊もあげるし、なんなら現実的に考えて無理なカード以外を
全てそろえたファイルをあげようか？メインストーリーのメンバーにも入れてあげるし。」

こいつ、交換条件まで出してきやがった。なんて汚い。でも悪くは無い条件だな。

主人公達と一緒にいられるのもいいし、なによりカード全てというのも魅力的だ。

「ちょっと聞くけど、シンクロ使って良い？」

「だめだ。流石に世界観が壊れる。」

駄目だとはなんとなく分かっていた。分かっていたけど聞きたかった。

「じゃあ、精霊とメインメンバー入りで。」

「よし。契約完了。じゃあお休み。」

…。早っ！もう消えたし！何なんだこれは！もうわけが分からない。
とりあえず寝よう！これはきっと夢だ！…と思いたい。

翌日。

あゝ。寝不足だ…。最近ろくに寝ていない気がする。デュエルアカ
デミアに来る前までは徹夜でこの世界の様子を調べていたし、昨日
はあんなことが…

あれは夢だったのか？精霊が出てきてないし、メインメンバーには
いったかどうか分からないし…

『キユウ』。

「わっ！」

顔を洗おうとしたら、鏡にデコイドラゴンが映っていた。

「お前、精霊だよな？」

『キユ!』

返答の仕方がよく分らないが、精霊のようだ。早速十台に見せに行くか。

ちょっと待て。十代がハネクリボーを初めて見たのは…
タイタン戦だ。まだ十代はハネクリボーのことを知らないんだ。

『キユ?』

「とりあえず、これからよろしくな。」

『キユウ!』

「それじゃ飯食いにいきますか。」

食堂にて

「やっぱレッド寮の飯は上手いな〜!」

「いや、アニキ。そんなにおいしくありませんよ。」

「ところで十代。昨日万丈目とデュエルしたらしいな。」

「げっ。何ではれているんだ。」

「昨日12時ごろやけに騒がしかったから、どうせ万丈目の挑戦を受けに行っただろ。」

「へへ…」

「でもなんで気炎は万丈目君から挑戦があったこと知ってるんス力。」

「いや、俺のところにも挑戦があったから俺と同じでクロノスを倒したお前にも挑戦があったんじゃないかって思ってたな。安心しろ。学校にばらしたりはしないから。」

「ありがとう！気炎！」

「いや、今後もよろしくな。」

第三話 夢? いいえ、現実です。(後書き)

次回はどうしようか・・・

第四話 月一試験！満足させてくれよぉ！（前書き）

シンクロ出したい…

しかしシンクロ出すと主人公が無敵に…

第四話 月一試験！満足させてくれよぉ！

気がついたら月一試験の前日の夜になっていた。

翔のラブレター（偽）事件にもまったく関わらず、平凡な毎日を送っていた。

十代と共に行動することが多いので、明日香とも知り合いになり、まあ人間関係は充実している。

さて、月一試験に万全の姿勢で臨むために、デッキ編成をしていた。

勉強の面では、十代と翔は授業中寝ていることが多かったが、俺はまじめに授業を受け、予習・復習をしっかりと行っていたので、ある程度余裕だった。多分中の上ぐらいの成績は取れるだろう。

肝心の十代と翔は、十代はデッキ構築を終え、即寝てしまい、翔はなぜか『死者蘇生』4枚に対してお祈りをしている。
死者蘇生が4枚…。いいなあ…。あれ、欲しいなあ。

そんな冗談は置いといて、部屋に戻りますか。

「やあ、久しぶりだね。」

…。あれ、これ前にもあったような？ああ、俺寝ぼけてるのか。
よし、決意を新たに、もう一度。

「私がただで閉めるなんて冷たいなあ。」

うん。夢じゃない。あっはっは。どうしよう。

俺の部屋にいたのはどうみても前回でおなじみの満足神様です。本当にありがとうございます。

ああ。こいつどうやって追いつくかな。

「追いつくとは酷いな。仮にも神だぞ。」

心を読んだか。流石に神だけはある。

「で、今度は何のよう？もう寝たいんだけど。」

「君にいろいろと説明したいことがあってね。」

まず君がこの世界にトリップしたのは、本当は他の人を飛ばすとき、間違つて君も一緒に飛ばしてしまったんだ。その時はやつちまったZE　なんて思ったけど、面白そうだから放置したんだ。」

「面白そうだからだと！お前の楽しみだけの目的かよ！？」

ああ、なんでよりによってこの神なんだろう。他のだったらもうちよつとまともだったかもしれないのに。

「過ぎたことを後悔しても遅いのだよ。黒木気炎君。」

あと他に言いたい事は、君の行動によってストーリーが変化するかな。

あまりにも自重しないとユベルが世界を超融合して『遊戯王GX』完』なんてこともあるからな。

慎重に行動しろよ。」

後悔とか慎重に行動とかは俺があんたに言いたいよ。

ストーリー変化はヤバイな。さすがにサブイベント的な物が追加されても、

主要ストーリーが変わったら俺は高橋先生に存在を抹　消されてしまう。

「まあこの世界でがんばれよ。あ、本来登場しないキャラが登場したら俺を呼んでいいから。」

あとカードをやる。お前のデッキで最大限に生かされるカードだ。」
オリカじゃないか。このカード本当に使っているの？大丈夫なの？

「問題ない。神の作ったオリカだからな。じゃあな。」

だから消えるのはやいて！なに、いきなり人の目の前に現れていきなり消えるなよ！

まあこのカードは超強力ってわけじゃないけど、それなりのパワーがあるしな。

このカードをデッキに無理なく入れられるようにしてから寝るか。

「しまった、寝坊した！」

昨日俺は徹夜であのカード達を有効に使うための戦術を考えてたら、寝たのが3時。

あと30分で試験が始まってしまう。

「いそいで飯食わねーと。」

こんなに遅刻しそうなのに、朝食はしっかりとる。なぜだろう。現実でもいつもそうだったな。
着替えも終わり、あと10分。このままダッシュで行けば間にあうかもしれない。

「行くぞ…。うおおおおお！」

開始1分前でギリギリついた。俺は全速前進できたため、もう体力が無い。

試験の中頃で十代たちが来た。お前ら、堂々と遅刻しやがって。俺なんか肉体的ライフを0にしてまで来たって言うのに。

試験終了。最初の方は疲労の方でろくに考えられなかったけど、まあ悪くは無かったな。

デュエルに関する問題は基本的なデュエルのルールとかそんなんばっかで簡単だったな。

スナイプストーカーを『我が身を盾に』で無効にできるかどうか。当然できないだろ。破壊は不確定要素なんだから。

さて、十代たちのところに行きますか。

「十代、翔、結果はどうだった。」

「さあ、寝てたからわかんないぜ。」

俺があんなに疲労と格闘して必死に答えを導き出したのにこいつはその間に…。

「僕はあんまりできなかったから、デュエルのほうでがんばるしかないッス。」

「やあ、みんな。テストはどうだった。」

「おう、三沢。俺は寝てたぜ。」

ああ、三沢。お前がいるとまともな会話ができていいぜ。

特にデュエルについての話題では、アドバンテージについて徹底的に考えた合ったり、

実用的なコンボ、ネタカードの使い道その他諸々のことで相談できるからある意味一番頼れる。

「まあ、俺はまずまずかな。少なくとも留年とか退学とかそんなことは無いな。」

「そうか、ところでお前のデッキ、お前は『ネタたっぷり』とか言っているが、結構強力だと思うが。」

驚いた。この世界ではこのデッキは強力なのか。

現実では帝に相打ちにされ、ゴヨウで奪われ、オネストで迎撃。

ライロに裁かれ、剣闘獣にいじめられ、次元で除外。満足ワンキルされたこともある。

色々酷い結果だったのに。

「あんまりそうは思わないけどな。」

「いや、収縮やフォースによってステータスを下降させ、ダークブレイズのダメージ量を増やし、
一気に敵を倒す。なかなかのビートバーンだと思うぞ。」

「まあ、戦闘サポートを除けば、最高攻撃力が2400だから、そこを付けば簡単に倒せると思うんだけどね。」

「ふん、オシリスレッドのドロップアウトごときのデッキ、しょせんそんなものだろうな。」

うわー。万丈目、多少は空気読めよ。

「ま、簡単に攻略できるデッキだしね。クロノス先生に勝ったのもマグレ。」

十代にだってあっさり逆転されたしね。多分ブルーのお前とやっても俺の負けだと思うけどな。」

「ふん、クロノスに勝って調子に乗っているのかと思ったが、そうではなかったか。」

レッドなど、エリート中のエリートである俺達に勝てる道理などないのだ。

ところで、俺の挑戦を断った理由はなんだ。」

えー。これどう答えりゃいいのさ。お前が弱いからなんていったら確実に怒るしな。

「あんな時間にデュエルをすることや、アンティは校則に反するからね。」

「なにより眠かったし。」

「貴様、眠気ごときで挑戦を断るとは、俺に喧嘩を売っているのか！」

「どうしよう。逆効果だったみたいだ。誰かこの空気を変えてくれ！」

「あなた達、何をしているの。」

「天上院君。いや、こいつが俺に喧嘩を売ってくるのでね。」

「クロノス先生が呼んでいるわよ。戻った方がいいんじゃない。」

「ちっ。引き上げるぞ。お前達。」

「「待つてくださいよ、万丈目さん。」」

取り巻き二人を連れ、万丈目は去っていった。

「明日香、ありがとう。流石にあの空気はまずかった。」

「いや、いいのよ。それより、試験の結果はどうだったの。」

みんなそれ聞くよな。まあ、試験後なんてそんなもんか。

「まずまずだね。デュエルのほうもがんばるか。その前に昼食代わりとしてドローパン買って来る。」

「そういえば、今日の昼の購買では、新しいパックが発売されるらしいッスよ」

「何！みんな、急ぐぞ！」

十代、カードの発売情報とかはしっかり調べた方がいいぞ。

「俺はいい。気炎と明日香は行かないのか。」

「いきなり違うカードを入れるとデッキが回らないから。」

「俺はもう通販で1箱予約してあるから。多分帰ったら届いてるだろう。」

この世界でも箱買いというものが存在することには驚いた。
俺は現実では月に1箱買ってたからな。週間が変わらずにこちらとしてはありがたいけどな。

「クロノス先生、呼びでしょうか。」

「よく来たノーネ。シニョールには、ドロップアウトボーイ、遊城十代を倒して欲しいノーネ。」

「わかりました。クロノス先生。ところで、もう一名、黒木気炎はどうするつもりでしょうか。」

「私が対戦相手を細工しておくノーネ。これであの二人は終わりナ

ノーネ。」

「おつ、十代、翔。戻ってきたか。」

「で、いいカードは当たったのかい。」

「それが、カードが売り切れてたんツス。」

「俺は朝トメさんを助けたおかげで、1パックだけ買えたけどな。」

ああ、そんなこともあったな。確か進化する翼が入っていたんだよな。

「そう、そろそろ実技が始まるわよ。」

「まずは、ライエロー、シニョール三沢ナノーネ。」

「早速俺の出番か。」

「対する相手は、オシリスレッド、」

ああ、三沢と当たる人、とりあえずドンマイ。一応ライエロー主席だしもう勝ち目は無いな。

「シニョール黒木ナノーネ！」

「え？三沢、今クロノス先生は誰の名前を言った？」

「お前の名前だが。」

「やっぱりか。できれば当たりたくなかったんだよ。」

三沢は空気とか色々言われているけど、その真の正体はデッキを複数持つている『メタデッキ』使い。

当然俺は原作を見てきている。三沢がどのデッキでデュエルするかは明白だ。

（ウォーター・ドラゴンデッキだよなあ…）

「まあ、当たってしまったものは仕方が無い。楽しくデュエルしようぜ。三沢。」

「ああ、俺も全力でいく。」

「「デュエル！」」

第四話 月一試験！満足させてくれよぉ！（後書き）

今後も満足神は自重しません。

次回はVS三沢です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7540k/>

遊戯王 ～ 黒き火炎 ～

2010年10月15日01時29分発行